

論文名： 義歯新製が咀嚼機能に及ぼす影響 (The Impact of a newly constructed removable denture to the objective and subjective masticatory function)

新潟大学大学院医歯学総合研究科

氏名 Salazar, Simonne

---

**目的：**本研究は、可徹性有床義歯(以下、義歯)を新製することによる主観的および客観的咀嚼能力の変化を評価する事が目的である。

**材料と方法：**対象者は、新潟大学義歯診療科または総合診療部において義歯を新製した患者 78 人(男性 26 人、女性 52 人、年齢 73.1 ± 9.4 歳)とした。評価は旧義歯装着下と新義歯装着下との計 2 回行い、対象者を残存歯の咬合支持域により、3 群(臼歯部咬合支持あり(w/P0)、臼歯部咬合支持なし(w/oP0)、無歯顎群)に分類した。客観的咀嚼能力は、咀嚼能力測定用グミゼリーと咀嚼能力自動解析装置を用いて咀嚼能率値を測定し、咀嚼能力の回復(=旧義歯咀嚼能率値/新義歯咀嚼能率値)についても評価を行った。主観的評価は、口腔関連 QOL(OHRQoL)、および食品摂取状況を尋ねる質問表を用いて、それぞれ評価を行った。各評価項目における旧義歯と新義歯との比較は、Wilcoxon's signed rank test と多重比較を用い、咬合支持域の違いによる群間の比較は、Kruskal-Wallis 検定および多重比較(P 値は Bonferroni 法を用いて調整)を用いて行った。

**結果と考察：**新義歯装着により咀嚼能率値、OHRQoL、食品摂取可能率、すべてにおいて有意に改善した。咬合支持域の違いにより咀嚼能力の回復は異なり、無歯顎群の咀嚼能力は旧義歯の 229%回復し、w/P0 群の回復率(127%)と比較して有意に高値を示した。OHRQoL は、w/o P0 群および無歯顎群において新義歯装着により有意に回復した。食品摂取可能率は、無歯顎群のみが新義歯装着によって有意な回復を示した。

**結論：**有床義歯新製による主観的/客観的咀嚼能力の変化は、咬合支持によって異なつた。また、無歯顎患者に対して義歯を新製し咬合を確立させることは、患者の QOL と食物受容性を改善することが示唆された。